

藝園草牧

第四卷 第三号

昭和三十一年三月一日 每月一圓 田發行

夕張郡長沼町字幌内一〇六六
印種苗株式會社
中央研究農場



3

附 表 格 價 子 種 播 春

草資源 増成改良 利用増進 に関する意見

田垣住雄

終戦以来私が最も考えましたことは、人口増殖に伴って食糧がだんだん足りなくなつて行くことを防ぐにはどうしたらよいかということであり、このことについていろいろ研究した結果、日本の大きな欠陥は草の生えているところの経営を農業の場合も林業の場合も見落して来たということであり、

わが国も随分長い間農業をやつて来たのでありますが、国土の一四〇位の耕地しか持つておりませんが、他の農地を入れても二〇〇位の経営より致しておりません。林野を見ても大部分は天然造林であり牧野を見ましても生えている草を喰わせているだけで培草はしてありません。したがつて農業というものは耕地の農業だけをやっていく、農業というものは木を植え草を作り、耕作物を栽培して即ち葉緑素を生産業の総合的なものに含めるものなのであります。私は過去八年間にわたり全国を廻り、殊に北海道に居つて種々の観点よりこれを見る

とき、外国の経営を取り入れた即ち草産をとり入れたところの営林、営農の解決点を見出し得ると考えておるのであります。この基本線に立つて日本の農業はどうあらねばならぬかについて申上げたいと思ひます。

基本方針
現在の既成農地帯である約六百万町歩は穀菽農作の現段階を維持増進する程度に牧草作を加ふに畜農業を推進するならば、六千万人の食糧の生産は可能であります。

次に現在の半経営地帯と申しますか、草ならば作り得る地帯即ち地勢、気候に制限を受けない実らなくともよいところの草を作り得る地帯は約四百万町歩あるのであります。この四百万町歩は有機質はあるがこれが分解しておらない泥炭地と、片方には

有機質の堆積が非常に少くして堆土がないために耕作するとすぐ荒廢してしまふという二通りになつておりますが、これらの土地は草を栽培して改良していくと漸次良くなつていくのであります。この四百万町歩に対しては先ず牧草作によつて主畜農業を進め、次第に地方を増進していくならば、地形その他の条件が悪くとも既成耕地の二分の一程度の生産力に推進することは可能であります。ここで二千万人の食糧生産は出来ると思ひます。

それから更に一つ広い見地から見ますと、林野が二千万町歩程ありますが、この三分の一くらいというものは牧草と林木とを兼営する地帯に仕立てることが出来ると見透しております。この八百万町歩を木材文明一辺倒から近代牧畜文明に推進し、未開地に人口を収容して、営林、育草、養畜、自給作の混同経営地帯として開拓をおし進め主畜林業、有畜林業を行つたらば、かりに既成農地の四分の一乃至八分の一の生産より上げ得ないとしても一、二千万人の食糧の生産を進め得るのであります。

日本の農業は平地ばかりにこびりついていないで、もつと広く太陽エネルギーを受け入れ葉緑素生産に進むならば一億人の食糧は国土で生産する力を持つておるのであります。世界の各国では日本よりも自然条件の悪いところ、それ位の生産から上げておるのであります。こういう観点から草を耕地にも入れ更に林地においても草を利用してゆくということが草地農業であつて、ただ草を作つて家畜を飼ふというような単純なことでは大きな展開は出来なないと思ひます。

かように開発して国土の一千八百万町歩を経営しても、程度で国土の半分が経営されることになるとまだ低いので、欧米諸国の経営率に比べるとまだ低いのであります。日本の農業の見解が耕地に偏して、草地や

林地の経営を総合してないため経営が展開してないのが、近代農法として草産を取り入れたい人口収容力の最も少い林野が開拓せられ食糧確保の道が拓けると確信するものであります。

方策
1 農政、農林業の根本的改革
日本のように人口過剰で食糧不足の解決を目的とする場合には、既成農地内への施策だけでは、とうてい目的を達し難いので、どうして既成農業概念を超越して、農業範囲を拡張しなければならぬ大転換期がきている。それなのに日本の農林行政、學術、技能の各面とも旧來の概念が根強く、各所に行き詰りを起しているのであります。近代的草地農業を進めることを根底として不良条件を克服して経営力を推進するためには、その開墾、管理、経営等に大きな差があつて、旧來の機構の延長や、片手間でやるようなものでないという認識に立脚して根本的な改革が必要であります。

2 重農政策を樹立し国土経営の推進
重農政策による過去の重農破綻の苦い歴史を省みること、過度の重農的躍進には危険を包蔵するゆゑ、重農的發展の夢を緩和して重農政策を併進し、国内資源の開発を国是とすることが、現在の日本の立場では最も平和的な政策であります。

国内資源の開発というところ、従来石炭、石油等の地下埋蔵の消滅資源を主体に考え、無尽の葉緑素系殖産資源が軽視され勝ちであるが、わが国の國産資源のうち最も天恵に富むものは全国に分布する葉緑素系資源力であり、世界的に恵まれた無限の天恵を背景にしてその土地の能力に依り林地、草地、耕地の経営力を増強するならば、この葉緑素系生産力は年々莫大な増収になるから、国土経営力を増進するに足るべき重農政策を樹立し、以て一大躍進を企図すべきであります。

日本のように人口過剰で食糧不足の解決を目的とする場合には、既成農地内への施策だけでは、とうてい目的を達し難いので、どうして既成農業概念を超越して、農業範囲を拡張しなければならぬ大転換期がきている。それなのに日本の農林行政、學術、技能の各面とも旧來の概念が根強く、各所に行き詰りを起しているのであります。近代的草地農業を進めることを根底として不良条件を克服して経営力を推進するためには、その開墾、管理、経営等に大きな差があつて、旧來の機構の延長や、片手間でやるようなものでないという認識に立脚して根本的な改革が必要であります。

2 重農政策を樹立し国土経営の推進
重農政策による過去の重農破綻の苦い歴史を省みること、過度の重農的躍進には危険を包蔵するゆゑ、重農的發展の夢を緩和して重農政策を併進し、国内資源の開発を国是とすることが、現在の日本の立場では最も平和的な政策であります。

国内資源の開発というところ、従来石炭、石油等の地下埋蔵の消滅資源を主体に考え、無尽の葉緑素系殖産資源が軽視され勝ちであるが、わが国の國産資源のうち最も天恵に富むものは全国に分布する葉緑素系資源力であり、世界的に恵まれた無限の天恵を背景にしてその土地の能力に依り林地、草地、耕地の経営力を増強するならば、この葉緑素系生産力は年々莫大な増収になるから、国土経営力を増進するに足るべき重農政策を樹立し、以て一大躍進を企図すべきであります。

日本のように人口過剰で食糧不足の解決を目的とする場合には、既成農地内への施策だけでは、とうてい目的を達し難いので、どうして既成農業概念を超越して、農業範囲を拡張しなければならぬ大転換期がきている。それなのに日本の農林行政、學術、技能の各面とも旧來の概念が根強く、各所に行き詰りを起しているのであります。近代的草地農業を進めることを根底として不良条件を克服して経営力を推進するためには、その開墾、管理、経営等に大きな差があつて、旧來の機構の延長や、片手間でやるようなものでないという認識に立脚して根本的な改革が必要であります。

2 重農政策を樹立し国土経営の推進
重農政策による過去の重農破綻の苦い歴史を省みること、過度の重農的躍進には危険を包蔵するゆゑ、重農的發展の夢を緩和して重農政策を併進し、国内資源の開発を国是とすることが、現在の日本の立場では最も平和的な政策であります。

国内資源の開発というところ、従来石炭、石油等の地下埋蔵の消滅資源を主体に考え、無尽の葉緑素系殖産資源が軽視され勝ちであるが、わが国の國産資源のうち最も天恵に富むものは全国に分布する葉緑素系資源力であり、世界的に恵まれた無限の天恵を背景にしてその土地の能力に依り林地、草地、耕地の経営力を増強するならば、この葉緑素系生産力は年々莫大な増収になるから、国土経営力を増進するに足るべき重農政策を樹立し、以て一大躍進を企図すべきであります。

日本のように人口過剰で食糧不足の解決を目的とする場合には、既成農地内への施策だけでは、とうてい目的を達し難いので、どうして既成農業概念を超越して、農業範囲を拡張しなければならぬ大転換期がきている。それなのに日本の農林行政、學術、技能の各面とも旧來の概念が根強く、各所に行き詰りを起しているのであります。近代的草地農業を進めることを根底として不良条件を克服して経営力を推進するためには、その開墾、管理、経営等に大きな差があつて、旧來の機構の延長や、片手間でやるようなものでないという認識に立脚して根本的な改革が必要であります。

2 重農政策を樹立し国土経営の推進
重農政策による過去の重農破綻の苦い歴史を省みること、過度の重農的躍進には危険を包蔵するゆゑ、重農的發展の夢を緩和して重農政策を併進し、国内資源の開発を国是とすることが、現在の日本の立場では最も平和的な政策であります。

国内資源の開発というところ、従来石炭、石油等の地下埋蔵の消滅資源を主体に考え、無尽の葉緑素系殖産資源が軽視され勝ちであるが、わが国の國産資源のうち最も天恵に富むものは全国に分布する葉緑素系資源力であり、世界的に恵まれた無限の天恵を背景にしてその土地の能力に依り林地、草地、耕地の経営力を増強するならば、この葉緑素系生産力は年々莫大な増収になるから、国土経営力を増進するに足るべき重農政策を樹立し、以て一大躍進を企図すべきであります。

日本のように人口過剰で食糧不足の解決を目的とする場合には、既成農地内への施策だけでは、とうてい目的を達し難いので、どうして既成農業概念を超越して、農業範囲を拡張しなければならぬ大転換期がきている。それなのに日本の農林行政、學術、技能の各面とも旧來の概念が根強く、各所に行き詰りを起しているのであります。近代的草地農業を進めることを根底として不良条件を克服して経営力を推進するためには、その開墾、管理、経営等に大きな差があつて、旧來の機構の延長や、片手間でやるようなものでないという認識に立脚して根本的な改革が必要であります。

2 重農政策を樹立し国土経営の推進
重農政策による過去の重農破綻の苦い歴史を省みること、過度の重農的躍進には危険を包蔵するゆゑ、重農的發展の夢を緩和して重農政策を併進し、国内資源の開発を国是とすることが、現在の日本の立場では最も平和的な政策であります。

国内資源の開発というところ、従来石炭、石油等の地下埋蔵の消滅資源を主体に考え、無尽の葉緑素系殖産資源が軽視され勝ちであるが、わが国の國産資源のうち最も天恵に富むものは全国に分布する葉緑素系資源力であり、世界的に恵まれた無限の天恵を背景にしてその土地の能力に依り林地、草地、耕地の経営力を増強するならば、この葉緑素系生産力は年々莫大な増収になるから、国土経営力を増進するに足るべき重農政策を樹立し、以て一大躍進を企図すべきであります。

日本のように人口過剰で食糧不足の解決を目的とする場合には、既成農地内への施策だけでは、とうてい目的を達し難いので、どうして既成農業概念を超越して、農業範囲を拡張しなければならぬ大転換期がきている。それなのに日本の農林行政、學術、技能の各面とも旧來の概念が根強く、各所に行き詰りを起しているのであります。近代的草地農業を進めることを根底として不良条件を克服して経営力を推進するためには、その開墾、管理、経営等に大きな差があつて、旧來の機構の延長や、片手間でやるようなものでないという認識に立脚して根本的な改革が必要であります。

2 重農政策を樹立し国土経営の推進
重農政策による過去の重農破綻の苦い歴史を省みること、過度の重農的躍進には危険を包蔵するゆゑ、重農的發展の夢を緩和して重農政策を併進し、国内資源の開発を国是とすることが、現在の日本の立場では最も平和的な政策であります。

国内資源の開発というところ、従来石炭、石油等の地下埋蔵の消滅資源を主体に考え、無尽の葉緑素系殖産資源が軽視され勝ちであるが、わが国の國産資源のうち最も天恵に富むものは全国に分布する葉緑素系資源力であり、世界的に恵まれた無限の天恵を背景にしてその土地の能力に依り林地、草地、耕地の経営力を増強するならば、この葉緑素系生産力は年々莫大な増収になるから、国土経営力を増進するに足るべき重農政策を樹立し、以て一大躍進を企図すべきであります。

実施方法
1 草地農業の普及と実践
これがためには緑化運動の昂揚特に植樹の重要と平衡して草生改良、裸地青草の普及、浸透と共にモデル経営地を各地に設定して普及、実践の中心としていく。

2 農民の自力更生による実践と助成、金融等の現物実行主義に透徹すること
3 国家財政の重点を国土の総合経営に指すこと

4 土地開発方式の改変
広大な土地を開発するためには、従來の開拓移民の自力開発に委ねる助成方式を改め、近代開発方式を採用し、農地を先ず国家が開発し、この開発地帯へ、有能であるが経営規模の狭いために伸びやんでいような農家を吸収し、直ちに生産力を發揮出来るような開拓方式に転換すること。

5 機械開発の構想
機械開発に當つては、この労力の一部は自衛隊にゆだね、大農機械の運搬、道路、橋梁の建設、通信、衛生、給与等自衛隊が演練を兼ねて実践するならば、国費節約、実行促進のため効果があるばかりでなく、国策の線に協力出来る。

6 乳肉消流の経済化と普及
現在の乳肉生産では高価なため普及しないうが、草産本位の低價生産になると、外国国民が一日一食だけパン食(乳肉共)になれば、米食三分の二、パン食三分の一になつて、この程度の食生活と草地生産力とが併進出来れば、食糧問題が解決した。

以上三要素について概説いたしました。このような基本方針に基いて、先ず草資源の調査を進め、実践に移し易く、経費の割合から地帯から、国力及び民力の可能な範囲で実行を促進し、これに伴つて生ずる諸問題の研究を併進して、困難を克服したならば、日本の国土は恐らく世界無比の殖産国家に發展することが出来ると確信する次第であります。

(以上昭和三十年十月参議院農林水産委員会草資源の改良造成並びに利用増進に關する常任委員会出席された北海道農業協同組合中央会囑託の田垣氏の御意見を要約したものであります。文責在編集部)